

研究種目：若手研究 (B)
研究期間：2007～2009
課題番号：19720032
研究課題名 (和文) 日本中世における十王図の移入と展開

研究課題名 (英文) Images of the Ten Kings of Hell (Jūō) : Their Introduction and Influence in Medieval Japan

研究代表者

山本 聡美 (YAMAMOTO SATOMI)

金城学院大学・文学部・准教授

研究者番号：00366999

研究成果の概要 (和文) :

中世日本で外来の十王図像が移入され和洋化するプロセスについて、作品調査と文献の分析を通じて考察した。本研究期間内に計9件の作品調査を実施した他、写真などを用いた画像資料の収集を行った。特に日本製十王図の多くに描きこまれる本地仏の組み合わせに着目し、調査結果を分析した。その結果、制作年代の遡る作例ほど組み合わせに多様性があり、また本地仏として大日如来を描く事例が多いという傾向が浮かび上がってきた。また、現存作例の和洋化が著しく進む13世紀後半～14世紀にかけての、仏書や日記・記録類に着目、仏事で十王図が懸用された事例を分析した。その結果、宮中や幕府関係の逆修・追善供養での懸用と軌を一にしながら、十王図と本地仏の組み合わせが決定され、日本的十王図への変容が促されたことが明らかとなった。以上の成果の一部は、『国宝六道絵』(共著、中央公論美術出版、2007年)などの出版物として公刊している。

研究成果の概要 (英文) :

This research project concerns images of the Ten Kings of Hell (*Jūō*), analyzing the process by which this foreign belief became nativized in medieval Japan. To illuminate this issue, I conducted a survey of various paintings as well as related historical documents. During this research period, I examined a total of nine works and collected materials such as photographs for other examples.

During the course of investigation, the prevalence of *honjibutsu* in Japanese paintings of the Ten Kings came to my attention, and I began analyzing the results of my survey from this particular angle. I discovered that the earlier the work, the more variation there was in the *honjibutsu* combination. There also was the tendency for *Dainichi Nyorai* to appear as the *honjibutsu* in many early cases.

Moreover, for the period between the middle of the 13th and the 14th centuries, when the nativization of the surviving examples accelerated dramatically, I examined temple documents, diaries, and other records to analyze the usage of the Ten Kings images through concrete ritual occasions in which they were employed.

As a result of my investigation, it became clear that the combinations of the *honjibutsu* within Japanese paintings of the Ten Kings came to be established through Buddhist memorial services sponsored by the imperial court and the *bakufu*.

Portions of this research have been made public in publications such as “The Paintings of the Six Realms at Shōjuraigoji Temple” (Chūō Kōron bijutsu shuppan, 2007).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	0	1,400,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,400,000	600,000	4,000,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美術史

キーワード：美術史 日本中世絵画史 十王図 六道絵

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は本研究以前にも、六道絵とその周辺図像に関する研究を継続していた。その過程で、12世紀までに一定の図像的完成を見た六道絵に、13世紀以降急速に外来の十王図像が流入し、十王イメージを軸とした新しい表象世界へと変貌する側面に着目、日本における十王図像の成立と展開という視点が、中世浄土教の伸張や東アジア交流史とも関わる極めて広い問題を提起するという着想を得た。

しかしながら考察の前提となる十王図研究は、その源流である中国や、年記作品に恵まれる朝鮮半島の作例を中心に行われてきた経緯があり、日本の作例に関する個別の作品研究や編年は、申請時点で十分行われていなかった。ただし、梶谷亮治「日本における十王図の成立と展開」(『仏教芸術』83、1974年)と、これを発展させた宮次男「十王経絵拾遺」(『実践女子大学美学美術史学』7、1992年)で、中国作例の画面構成を基準に、日本の作例も含めた十王図の分類が行われており、本研究でもこれを考察の土台とした。特に、二尊院本と浄福寺本に関して、梶谷・宮両氏の前掲論文で、十王図の和様化を示す作例として詳しく論じられており、作品研究の蓄積があったことから、これを本研究課題の中心に据えた。

また二尊院本と浄福寺本は、やまと絵研究の側面からも室町時代土佐派の仏画作品として注目され、谷信一「土佐光信考 下」(『美術研究』103、1940年)では浄福寺本を光信作品として、梅津次郎「二組の十王図—行光と光信の画跡—」(『仏教芸術』36、1958年)では二尊院本を行光作品として位置付けている他、高岸輝『室町王権と絵画 初期土佐派研究』(京都大学学術出版会、2004年)では、二尊院本の制作目的が足利尊氏逆修にあった可能性が指摘されるなど、その絵画史

的・歴史的な位置付けが解明されつつあった。

これらの研究動向を踏まえ、研究代表者は、両本を、やまと絵系画派における十王図像継承の実態と、支配者層の十王図受容の様相を考える上での中核的作例と見なすに至った。

また南都における十王図制作に関連して、申請者は旧論「高野山麓天野大念仏講旧蔵『六道絵』の制作背景—南都所縁の十一面観音菩薩図像を中心として—」(『和歌山県立博物館研究紀要』11、2005年)で、室町時代後半に製作された表題作が、南都特有の六道・十王思想に則った造形である点を明らかにしており、その地域性に着目するきっかけとなった。これに加えて、十王図を含む所謂「寧波仏画」の制作地周辺の宗教的環境の解明が、井手誠之輔「日本の宋元仏画」(至文堂『日本の美術』3、2001年)で進展し、東アジア地域の人や文物の往来を視野に入れた作品研究が活発化していたことも本研究の発想の原点となった。

2. 研究の目的

本研究では、現存十王図に関する基礎資料の集成を第一の目的とした。申請時には、中国の十王図約20件、日本で制作された中世の十王図約15件をリストアップしていたが、研究が進展する中で、日本製十王図として新たに5件の作例を確認し、研究対象に加えることとなった。日本の作例については、地方自治体史からの作品情報収集が有効であった。本研究で特に研究上の重要度を認める約10件については、作品調査と撮影を実施、画像データの充実をはかることを目指した。

以上に加えて、十王信仰関連文献に関する基礎資料の集成を第二の目標に掲げた。寺院関係文書や中世日記から、忌日供養や逆修など十王信仰に関連する具体的な法会の記事を収集、データベースとして集積することを目指した。

上記の作業を通じて得た成果を、学会発表や学術論文として報告し、さらに研究期間後は、本研究で収集した画像データを集成した出版物として公刊し、今後の十王図研究に供することを最終的な目的とした。

3. 研究の方法

基礎的作業として、既存のカラー写真の収集を行い画像資料の充実につとめた。写真に関しては、各作品所蔵先や研究機関保有4×5ポジフィルムを活用した。これに加え、3年間の研究期間で合計9件の作品調査・撮影を実施した。新規撮影に際しては、画像資料の構築と利用の面でより適した高精度(1200万画素クラス)デジタル一眼レフカメラによる全図・部分図両方の撮影を行った。さらに、特に重要な作例で、これまでに4×5ポジフィルムによる撮影が行われていない作品については、撮影技師の協力を得て新規撮影を行い、高精細画像の保存や出版への利用に備え方針をとった。収集した画像資料は、本研究完了後に全図・部分図のカラー図版を完備した刊行物として成果を還元する予定である。

文献史料に関しては、公刊されている寺院関係文書や中世日記、また未公刊史料の写真版から忌日供養や逆修など十王信仰に関連する記事を収集・分析し、十王図との関連を検討した。

4. 研究成果

平成19年度は、典拠テキストの問題に焦点をあてた調査・分析を行った。13世紀後半の作例である聖衆来迎寺所蔵「六道絵」15幅中には、閻魔王庁を描いた1幅が備わり、これが現存する最古の日本製閻魔王画像である。その図像は、閻魔王や冥官の服制、獄卒や罪人の姿態など多くの点において、中国寧波地方で制作された十王図からの影響が指摘できる。その一方で、中国製十王図では十王各々の周囲に配されるべきモチーフが、聖衆来迎寺本では閻魔王一体の周囲に集められ再構成されており、また瓦葺の屋根やみずらを結った俱生神など、中国製十王図には見られない要素も多く確認できる。この点から、聖衆来迎寺本の閻魔王庁幅成立に先立って、中国製十王図に依らない日本独自の閻魔王イメージの蓄積があったものと推定できる。本研究では、これを六道絵の典拠テキストの問題から考察した。その結果、13世紀以前までに六道絵の典拠として一般的であった『正法念処経』において、六道世界で亡者を断罪する「閻羅王」(閻魔王と同義)が繰り返し登場する点に着目するに至った。日本における十王信仰移入に先立って、同経を通じて閻羅王理解が進展していた可能性は高く、中世初頭に新たにもたらされた十王図の

受容にも影響を与えたものと考えられる。また、聖衆来迎寺本閻魔王庁幅画中色紙形には、『仏説地藏菩薩発心因縁十王経』からの引用文が記されている。同経の原型は唐代に成立したものと推定されるが、大幅に加筆・改変されつつ中世日本で流布した点に特徴がある。同経に詳述される、閻魔王の住処、業鏡や獄卒による責め苦は『正法念処経』における記述と重なる点も多く、所為経典という側面から見ても、日本における十王信仰展開の背景には、『正法念処経』を通じて進展していた閻羅王理解が前提となった可能性が高いことが指摘できる。

平成22年度は、作品調査に重点を置いた。中国製十王図として、金處士本(ボストン美術館所蔵3幅)と三重県・西蓮寺本(11幅)、日本製十王図として三重県・常住寺本(10幅)と京都・個人蔵本(1幅)、六道絵中に十王が描かれる14世紀の作例として、極楽寺本(3幅)と出光美術館本(2幅)の合計6作例に関する調査・撮影を実施した。特に、今年度の調査過程で新たに存在が確認された京都・個人蔵本は、14世紀の作例と見られるが、三体の冥王と不動明王や大日如来などの尊格が曼荼羅的構図で配置された、これまでに報告されていない図像構成の作例である。その儀軌的な解明は今後の課題であるが、現時点では、密教系寺院における十王図受容の様相を伝える作例と考えている。

上記調査で撮影した画像については、持物・姿勢・眷属・本地仏・付随する地獄のモチーフなどで図像的特徴を整理し、データベースの構築に着手している。

また、三重県伊賀上野市に所在する西蓮寺及び常住寺の作例は、当初木津川を通じた南都寺院との関わりが深いものと予測して調査に臨んだが、両寺に伝来する文書類や他の仏画などを含めて検討した結果、天台真盛宗の西教寺と関連する作例である可能性が新たに浮上した。特に常住寺本は、本地仏として『地藏十王経』に説かれない大日如来が描かれているなど、他に類例の少ない図像的特徴も備えており、日本において定型化する以前の十王図像を伝える重要作例であることが判明した。

平成21年度は、作品調査としては、京都・個人蔵「十王図」(1幅)、ベルリン国立アジア美術館蔵「十王図」(1幅)、同蔵「地藏十王図」(1幅)を実施した。なお、交付申請書に記載したハーバード大学・サックラーミュージアム蔵「十王図」(2種類、合計13幅)に関しては、新型インフルエンザの影響で急遽調査を中止する事態が発生し、年度内にこれを遂行することができなかった。研究期間外とはなるが、次年度以降に再度日程を調整し調査を実施したい。

加えて、十王信仰に関連する史料として、

室町時代初頭の宮中及び幕府周辺における仏事を記録した『定勝院殿集纂諸仏事』（名古屋市蓬左文庫蔵）に着目、本史料に記載された追善・逆修・年忌供養・水陸齋における「十王図」の使用事例を分析した。その結果、応永二十年（1413）九月二十日に近江永源寺にて行われた逆修供養に、「閻魔法王、陰府十王」の像が使用された事例をはじめ、室町時代初頭の仏事における、十王信仰からの影響や十王の彫像・画像の使用状況が具体的に浮かび上がってきた。本史料が記された時期は、二尊院本「十王図」やその転写本である浄福寺本が成立し、十王図の図様が著しく和様化する時期とも重なっており、ここに残された記録は、社会的上層における使用事例と図様の変化の相関関係解明の糸口となる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ①山本聡美、Death and Disease in Medieval Japanese Painting、金城学院大学論集人文科学編、査読無、6巻2号、2010、81-96
- ②山本聡美、『正法念処経』から「病草紙」へ—経説の変容と絵巻の生成—、國華、査読有、1371巻、2010、5-15
- ③山本聡美、『正法念処経』経意絵としての「地獄草紙」「餓鬼草紙」「病草紙」、金城日本語日本文化、査読無、85巻、2009、1-20
- ④山本聡美、金剛宝戒寺所蔵「仏涅槃図」の図像と制作背景、大分県立芸術文化短期大学紀要、査読無、45巻、2008、27-43

〔学会発表〕（計2件）

- ①山本聡美、Death and Disease in Medieval Japanese Painting, New England East Asian Art History Seminar: sponsored by the Rockefeller Fund for East Asia, 2009年3月14日、米国
- ②山本聡美、病草紙と『正法念処経』「身念処品」、美術史学会（西支部例会）、2008年1月26日、九州大学

〔図書〕（計5件）

- ①山本聡美、他、ブリュッケ、イメージとパトロン、2009、396
- ②山本聡美、他、岩田書院、九相図資料集成、2009、246
- ③山本聡美、他、美術出版、浄土の美術、2009、175
- ④山本聡美、他、竹林舎、日本美術史の杜、2008、615
- ⑤山本聡美、他、中央公論美術出版、国宝六道絵、2007、376

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 聡美 (YAMAMOTO SATOMI)
金城学院大学・文学部・准教授
研究者番号：00366999